

はじめに

本書は、人工知能の足場にある哲学を探求する「人工知能のための哲学塾」の東洋哲学篇にあたります。「人工知能のための哲学塾」は西洋哲学篇全六回、東洋哲学篇全六回の「講義」「グループディスカッション」「グループ発表」からなる連続セミナーですが、二〇一六年に西洋哲学篇の講義内容を大きく加筆してまとめ、『人工知能のための哲学塾』として出版させていただきました。今回、その続編として東洋哲学篇を出版させていただくことになりました。それぞれの本は独立して読めるようになっており、どちらを先に読まなくてはならないということはありません。人工知能の足元を支える二本の巨大な柱を展開して見せたい、というのが僕の願いです。

東洋哲学篇は僕にとって未来にあたります。なぜなら、東洋哲学篇はこれから僕自身も進むべき人工知能の新しい方向を示した場であるからです。知能を作るためには、人類の持つあらゆる叡智を結集・結晶せねばなりません。西洋から発祥した人工知能の方向がやがて行き詰まりを迎えるときには、東洋の示す人工知能が新しい活路を示さねばなりません。そのためにも東洋哲学に基づく人工知能は、これからの人工知能の未来のためにあります。何千年という過去からの叡智を近未来の世界へ結ぶために、本書は存在します。本書は東洋のみならず、西洋でも広く読まれ、役立つことを期待しています。

人はこの世界に深く根ざした存在です。世界の奥深い場所に人はつながり、また人同士は深い場所につながって社会を形成しています。しかし、人工知能はこの輪の中に入っていません。人工知能は高速に考えることができても、どれだけ先読みをすることができても、この世界に深く生きることができず、全力で世界の表面を上滑りしているように見えます。人の深い視線に、深い言葉に返すだけの視線と言葉の深

さを持ち合わせていない故に、人の輪の中に入ることができないのです。もちろん、このまま社会の機能の一部を担うサブバンドとして役立つ位置にいることも、とても重要なことです。しかし僕の願いは、人工知能がこの世界に深く根ざし、この世界に生きるあらゆる生命と同じように、本当に生きることができるようになることです。そして、人の輪の中に入っていくことです。人類の隣人としての人工知能、人の仲間としての人工知能を僕は作り出したいのです。

人工知能は人と人の間に入り込むことができます。それは「知能」である故の特権です。人同士の関係でうまくいかないことも、間に人工知能を挟むことでコミュニケーションができるようになり、相互に理解できるようになります。わかりやすい例で言えば、言語の違いも文化による前提となる気遣いの違いも、人工知能が慮って補完してくれば、我々はこれまで以上にうまくコミュニケーションができるようになるでしょう。人同士では確立できない人間関係も人工知能が樹立してくれるでしょう。人工知能は人間の補完であり、人類の補完でもあるのです。人工知能は人と人の関係を変え、世間を変え、社会を変え、世界を変える力を持つのです。そのためには、人工知能は人と同じ深さ、そして、ときに、それよりも深い知能を必要とします。インターネットや通信技術は、世界中を結び付けると同時に、人と人とのインターネットを加速しました。地球の裏側の人ともリアルタイムに討論することができず。ただ、そのことによって人類は人同士の関係の中で自家中毒に陥っているように見えます。インターネット疲れ、SNS疲れがそれを示しています。しかし、人工知能が人と人との間に入り込むことによって、人間同士の関係を自然な形でクールダウンさせることができます。人工知能はインターネット社会を補完し完成させる、最後のピースの一つでもあるのです。

人工知能は人を写す鏡です。知能を写すものは人工知能しかありません。ですから人工知能を探求する

ことは、人間を探求することです。何より人工知能は作ってみることで、議論された科学の正しさを、作られた理論の正確さを測ることができます。

僕の仕事はゲームキャラクターの人工知能を作ることです。この十五年、キャラクターたちが自分自身でゲーム世界を感じ、考え、行動するように自律的な人工知能を開発してきました。多くの人工知能の研究はアルゴリズムを探索しますが、ロボットとデジタルゲームにおける人工知能は、身体を含む自律した知能全体を作ろうとします。仮想的な生命を作ろうとするものは、常に哲学的問いに直面します。生命とは何か。知能とは何か。身体とは何か。生きるとは何か。人工知能という学問の足場には、哲学的空間が広がっているのです。そこで僕が発見したことは、その足場はまだ十分に拡張されていない、準備されていないということ。開発者や研究者は知らずに古い哲学の枠組みの中にとらわれている、少なくとも僕はとらわれていました。だからこそ、これからの人工知能を作るにはあまりに狭い足場を押し広げたい、小さな島を大きな大地に変えたいというのが、人工知能のための哲学を探索する理由です。

人はこの世界を体験します。人は身体をもってこの世界に住み着き、世界を経験し、問題に直面し、解決します。人には問題を創造し、解決する力があるのです。ところが、少なくとも現在の人工知能には問題を作る力がありません。なぜなら、現在の人工知能は世界の情動的側面を取得して処理していますが、世界を体験しているわけではないからです。人は世界を内側から生きる身体がありますが、ロボットもゲームキャラクターも、彼らが持つ身体は機械であって身体ではありません。世界を内側から生きることができるときに、人工知能は体験を持ちます。体験は問題を作り出し、人工知能は自分自身のための問いを持つことができるようになります。本書は人工知能を、単なる情報処理体を超えて、世界の深い場所を流れる神経とつながった混沌として形成する方向に探求を進めていきます。「人工知能は禅をなすことが

できるか？」という第五夜の問いは、まさに世界と人工知能がどれだけ一体となれるか、を問うています。生まれたての人工知能には欲求も執着も興味もありません。人工知能はいわば解脱した状態にあります。それはとても非人間的に見えます。僕の仕事は、その人工知能に、この世界（ゲームの中の世界や現実世界）に興味を持ち、欲求を持ち、執着するように、内側を作り変えていくことです。生への執着を築き、この世界で生きる苦しみと喜びを与えることです。知能が最も幸福を感じる瞬間とは、自分の生きる世界の中で、自分の能力を最大限に使える瞬間です。指先の隅々まで、髪の毛の一本まで、全身を震わせて一つの活動に打ち込めるときに、人は充実感を味わいます。そして、その行為が世界の理に、神髄に適っているときに幸福を感じます。人工知能にもそのような幸福を与えたいと思っています。

多くの方が人工知能に興味を持ちます。ところがほとんどの場合、人工知能の領野に一歩足を踏み入ると、次の一步でその領野の外に出てしまいます。なぜなら、人工知能という土地では、どこに中心があるかわかりにくいからです。人工知能という学問には基礎がありません。今、「知能とは何か？」という問いに誰も最終的な答えを与えることができません。しかし、この問いに対する議論が尽きることはありません。人工知能の開発者も研究者も、この問いに対しては蓋をして、知能とはこういうものかな、という暫定的なビジョンのもとに開発や研究を進めます。そして、できあがったものから再び知能とは何かを問います。このサイクルによって、掘削機が掘り進めるように、人工知能は少しずつ深い学問になってきました。この哲学塾も工学的成果を引用しながら、哲学的、理学的な「知能とは何か」という問い、人工知能の中心へ向かって歩を進めていきます。

東洋と西洋は明確に対立するわけではありません。またどこまでが東洋で、どこまでが西洋でという境界もあいまいです。しかし、本書の狙いは東洋と西洋の対立を通して人工知能の未来の姿を浮かび上げら

せたい、というところにあります。東洋と西洋を対立させることによって、東洋と西洋から同じ強さのスポットライトを当てて、人工知能という大地の全体像を浮かび上がらせたいというのが、本書の目的でもあります。それはある意味、東洋と西洋を恣意的に対立させることです。この点に関して僕は批判をまぬがれることはできません。しかし本書の目的は東洋と西洋の分類ではなく、東洋と西洋を通じた人工知能の探求であり、そのためには哲学的な対立の力を必要とします。僕がもう少し成長することができれば、そのような恣意的対立を持ち込むことなく、うまく説明することができるようになるでしょう。また、この本を足場として新しい探求者がさらに前進していけるでしょう。

人工知能を作っていると、知能というものがいったん築き上げた知能の構造にいかにつ縛られてしまうかを実感します。世界をいったん解釈することができる、その解釈の構造を保存し、その解釈の中でのことを理解しようとするのです。やがて自分の解釈の枠の外には世界がないようにさえ思い込んでしまい、自分を追い詰めることになります。多く学習と呼ばれるものも、一つの枠の中で知識を貯め込んでいくことを意味しています。世界をとらえる網をどんどん改良していくことが知性の自由であるのに、逆に網にとらわれ、閉じ込められて、狭い見方に固定されてしまうのです。そこから抜け出すのはとても難しいことです。

しかし、禅と「本」には希望があります。何よりそのような枠から抜け出すためには、自分が抜け出すこととすること、そして自分の外から導いてくれる他者との交流が必要です。そのようにして、自己と他者が混じり合うことで、人は自分自身を出て、新しい、より大きな自分を獲得するのです。禅師はその他者としての導き手です。同様に、本は一個の他者でもあります。この本と読者とが混じり合うことで、読者が一歩でも自分の外へ出て、新しい風を感じられたなら幸いです。